

大城ひかるのベトナム通信

通信

-26-

シンチャオ
(Xin chào)
おきなわ



でカイン先生（右）とリナさん、リナさんの息子（筆者撮影）

ホーチミンの地理教師カイン先生は毎年最初の授業で、生徒たちにこう伝えます。「ベトナムには54の民族がいる」。以前にも紹介しましたが、ベトナムの人口の85%はキン族と呼ばれる人々。カイン先生のクラスの生徒も人口分布の通りほとんどがキン族で、さらにホーチミンという大都市圏のためか、他の民族と

触れ合う機会がほぼありません。そういう生徒たちの視野を広げようと、カイン先生はベトナムが多民族国家であること、53の少数民族にはそれぞれユニークな文化的背景があることを語ってきました。少数民族の抱える課題が経済的な問題だということとは広く知られていません。自身もキン族であるカイン先生は「キン族は少数民族にもっと責任を持つべき」と感じていたそうです。その情熱から、とうとう10年間務めた中学教師を辞め、少数民族を支える仕事に転身しました。

タオイ族支えるカイン先生

私たちの出会いは全くの偶然でした。少数民族の村を訪ねようと、環境の村を目指していた時です。休憩したある施設で、ガイドから話を聞いた女性が村の案内を買って出てくれたのです。その女性が冒頭のカイン先生だったのですが、いきさつを聞かされていなかった私は、休憩後にいきなり車に乗り込んで、ベトナム語でペラペラ話すこの女性はいったい何者だろうと思っていました。高床式住居の前で車が止まり、テーブルに案内された時は、「何か売りつけられるのではないか」と思ったほどです。

カイン先生に電話で呼び出されて、現れたのがタオイ族のリナさんという女性でした。前回お伝えした通り、タオイ族はホーチミンルート建設のため、チュオンソン山脈から連れてこられた山岳民族。この村には340

人のタオイ族がいて、最高齢は68歳だそうです。わずか2世代前にラオスとベトナムの2つの国に引き裂かれてしまったと聞き、胸が痛くなりました。今でも山の向こうには親戚がいて、年に1、2度帰省するそうです。山はすぐそこに見えますが、「山道を行くと1か月はかかる」とリナさんが笑いながら話してくれた時、目の前の故郷が実に遠い場所であると言っているようで、私は何と返答していいか分かりませんでした。

今でもタオイ族は米を作り、畑を耕し、川で魚を捕る自給自足の生活です。何か産業を興そうと、カイン先生やリナさんたちが中心となって、伝統織物の製品化やエコツーリズムに取り組んでいるそうです。昼食もごちそうになり、何か力になりたいと思い、製品を買いたいと申し出たので



伝統織物を織るタオイ族女性。観光産業を興そうと取り組む（筆者撮影）